論文の内容の要旨

氏名：甲斐　順
博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）
論文題名：日本人英語学習者による従属接続詞の産出における母語の影響

要　旨：

第二言語習得研究において，学習者が犯す誤りは，母語からの転移による誤りと発達途上の誤りの二つに分類されている。母語からの転移は正の転移と負の転移の二種類に分けられる。正の転移は，学習者の母語の特性がプラスに作用し，母語の特性がマイナスに作用することを負の転移，または干渉などと呼ばれている。第二言語学習者が犯す誤りは，発音，語彙，形態素，文法，談話などで見られるが，母語からの転移による誤りの例として，日本人英語学習者が本来子音で終わらなければいけない‘*pig*’のような単語を/pig/ではなく，/pigə/のように発音することが知られている。

先行研究から中学生だけでなく，高校生や大学生を含む日本人英語学習者は，従属接続詞を用いて正しい英文を作る点で課題が見られる。また，母語の日本語が，英語で産出する際の誤りに影響しているという報告もなされている。本研究では，母語からの負の転移を制御し，正の転移を促す指導，従属節を主節の前に置く指導が，従属節を主節の後に置く指導よりも日本人英語学習者の産出に効果があるかどうかを検証することを目的として，副詞節を構成する「時」を示す従属接続詞 *before*, *after*, *when*, *whenever*, *while* を主な対象として，実証研究を行った。

まず日本語と英語の従属節の構造について整理した。日本語の従属節は主節に対して原則的に前置されるのに対して，英語の従属節は主節に対して前置することも後置することも可能である。また従属節内の従属接続詞の位置は，日本語では動詞の後に位置するが，英語では主語の前に位置する。これらの違いが日本人英語学習者にとって従属節の習得を難しくしている要因であると考えられる。

英語の従属節の位置について，コーパスデータを基にした先行研究では，全体的に英語の従属節は後置される傾向にあるが，「条件」や「時」などの個別の概念で調べると前置される傾向や後置される傾向を示すなど，先行研究が基にしているデータにより結果は異なっていた。また日本人英語学習者による従属節の位置については，先行研究では母語の影響を受けて従属節を前置させる傾向を示すものもあれば，そうでないというものもあった。

本研究では，Ringbom の一連の研究(Ringbom, 2007, 2013, 2016; Ringbom & Jarvis, 2011)で示されている転移の考え方，特に procedural transfer を理論的枠組みとした。procedural transfer の中では，情報を体系づける抽象的な原理が転移される，学習者は母語と第二言語が多かれ少なかれ同じ方法で機能するという仮説に単純に依存していることが述べられていた。つまり，第二言語学習者が母語の，例えば文法的な知識を第二言語に転移させることになる。学習者の目標言語の産出で起きる procedural transfer には① intrusive（介入），② inhibitive（抑止），③ facilitative（促進）の 3 種類があり，① intrusive transfer は，母語に基づく項目や構造の不適切な使用につながる。② inhibitive transfer は学習者が新しい単語や構造を適切に使う方法を学ぶのを妨げることを指し，③ facilitative transfer は，母語と目標言語の体系間の類似性により，目標言語の情報にアクセスし，処理し，体系づける学習者の能力を促進するというものである。procedural transfer の考え方，特に①介入を抑止し，③促進を指導に活用することで，学習者に正しく従属接続詞を用いて，英語の従属節構造を産出させることが可能になると仮定した。その上で英語が日常的に話されていない日本の英語教育環境下では目標文法事項を効率的に，しかも効果的に学習することが望まれることから明示的な文法指導を行うことを提唱した。

予備調査１として日本人中高生の英作文を集めた Japanese English as a Foreign Language Learner Corpus（JEFLL コーパス)に見られる英語の「時」を表す従属節の位置について調査した。*after* や *when* を含む従属節については，主節に対して前置される傾向を示し，*before* を含む従属節は後置される傾向を示し，*while* についてはどちらかといえば後置する傾向を示していたが，*whenever* についてはどちらとも言えないという結果であった。予備調査２として，日本人英語学習者が「時」に係る従属接続詞を用いる際，産出する英文のどのような点で母語の影響を受け，誤りを犯すかを調査した。対象とした従属接続詞は，*before*, *after*, *while*, *when*, *because*（*so*, *as*），*whenever* であった。*whenever* については使用している調査対象者は一人もいなかった。*when* を用いて過去進行形の文や過去完了形の文を産出する際に従属節を

主節に対して前置する調査対象者が多く見られたが，その他の従属接続詞については，従属節を後置する調査対象者が多かった。また，主節と従属節で主語が同じ場合に，従属節で主語を落として書いている調査対象者が見られた。特に従属節を後置する場合においてその傾向が高かった。また，調査結果から，英語の産出に少なからず影響を及ぼしている可能性が示唆された。

予備調査の結果を踏まえて，母語からの負の転移を制御し，正の転移を促す指導，具体的には従属節を主節の前に置くことを強調する指導が，従属節を主節の後に置く指導よりも日本人英語学習者の産出に効果があるかどうかを三つの実験を通じて検証した。

実験１では従属接続詞 *before* と *after* について，実験２では従属接続詞 *when* を用いた過去完了形について，実験３では従属接続詞 *whenever* について，次の三つに集約される研究課題を設定し，実証研究に取り組んだ。研究課題①は，母語の日本語の影響が第二言語である英語に見られるかどうか，研究課題②は，正の転移を促進し，負の転移を抑制する指導は効果があるかどうか，研究課題③は，明示的な指導は効果があるかどうか，であった。

研究課題①について，日本語では従属節を主節に対して原則的に前置することから，日本人英語学習者が英語で産出する際にも同じように従属節を前置する傾向を示す，つまり転移が行われると想定した。実験１の従属接続詞 *before* と *after* については，事前テストの結果から後置する傾向が示された。実験２の *when* については，従属節を前置する傾向が強かった。実験３では，事前テストに *wherever* 以外の接続詞も含んでいるためはっきりと断定できなった。実験の中で *until* や *while* といった従属接続詞もテスト問題に含めて実験を行った。これらの従属接続詞を含む従属節は後置される傾向が示された。

また主節と従属節の主語が同一の場合，日本語では明示されないが，日本人英語学習者が英語で産出する際に，一つの節内で主語を明示せずに産出することは母語の影響であると考えらえる。実験１の従属接続詞 *before* と *after* については，このような誤りを犯すことがわかったが，実験３では，必ずしもそうだとは言い切れなかった。実験１の実験参加者は，実験３の実験参加者より英語学力の面で課題があり，そのことも結果に関係しているかもしれない。

研究課題②については，実験１や実験３の結果から，正の転移を促す指導及び負の転移を抑制する指導は効果があったと言えるだろう。特に従属節を前置させるという日本語の特徴から，実験１では，誤り（従属節内で同一主語の一方を落とす，出来事の発生順序を取り違えたような Event 2 *before* Event 1 や Event 1 *after* Event 2 のような誤り）が減っていた。実験３では他の指導法と比べ，特に遅延テストの段階で有意差が見られたことから，効果があると言えるだろう。さらに他の接続詞への正の転移が見られ円滑な習得につながるごとが期待される。

研究課題③については，実験１から実験３を通じて，明示的な指導について効果があったと言える。また，実験１が約１か月後，実験２が１か月後に遅延テストを実施し，指導の効果は下がっていたが，実験３は２週間後に遅延テストを実施し，指導の効果が維持されていることが判明した。１度しか指導を行わない文法項目については，定着を図るために繰り返すことが必要なのは述べるまでもないが，記憶が薄れる前に，再度提示し，習得を促すような工夫が必要だろう。

本研究では，Ringbom の研究で示されている procedural transfer を基に，特に①介入と③促進に焦点を当てて実証研究を行った。実験の結果から，類似性に着目し従属節を前置する指導は従属接続詞の習得に効果があった。また短期的ではあるが目標文法事項に対する指導の効果も実験３では維持されていることが明らかになった。１度の指導で効果的，効率的に文法事項を習得しなければならない日本人英語学習者にとって，類似性に着目し促進を促し，負の転移を抑止し，明示的に指導を行うことが，学習の負担を減らすことにつながるものと思われる。

本研究の課題として，今後，実験参加者を他の高校生に広げて実証検証を行う必要性，中学生を対象にして実証研究を行う必要性，他の従属接続詞での指導の効果の検証に取り組む必要性を指摘した。また，本研究では筆記という手法により産出を測定していることから，口頭により産出を検証する研究が待たれるとともに，従属節を前置する他の言語への検証の可能性も指摘した。さらに，英語の前置詞句習得への適用の可能性も今後の課題とした。

本研究では，従属接続詞を含む従属節を対象に母語と目標言語の構造上の類似点について正の転移を促進し，一方相違点，つまり負の転移を抑制する指導を、外国語として目標言語（英語）を学ぶ日本人英語学習者に明示的に指導した結果，一定の効果が見られた。この点で，第二言語習得研究における「転移」について一つの研究成果を示していると考えられる。今後発展的に研究が進むことが期待される。